

## 「サイレント・ウェイ式仮名導入表」使用解説

[2009 年度秋学期版]

早稲田大学大学院日本語教育研究科 川口義一

### ◇ 五十音図の「サイレント・ウェイ式」導入

仮名文字の表記と発音の指導のために、サイレント・ウェイによる五十音表の導入を推奨しますので、励行してください。と言っても、仮名文字はシラビックな音のまとまりを文字にしたものですから、アルファベット型表記の他の言語のように、サイレント・ウェイの特色である特殊なカラー・チャートを作る必要はなく、始めからふつうの市販の五十音表を基にして作った「仮名導入表」を使います。この解説の中では、この表を利用したひらがな・カタカナの発音・表記の導入を「SW式」と呼び、比較のために、市販の五十音表を使うものを「市販式」と呼んでおきます。

まず、黒板に「SW式」の仮名導入表のうちからひらがな表を貼り付けて、日本語には五つの母音があって、それがいちばん右の一行であることを説明してから、ポインターで「あ」を指して、この音が何であるか類推して出してみるように学習者に指示します。「あ」の音はどの言語にでもある基本的な母音の一つですから、「母音を出してごらん」と言うと、多くの場合は「あ」が出できます。「あ」の音を出した学習者が特定できたら、その学習者にもう一度同じ音を出すように促して、その音でよいことを、「はい、その音です」と声を出して確認し、他の学習者にも言わせませす。全員が「あ」と読めたところで、次に「い」を指して、同じように進めます。もし「あ」を指した時に「い」と読む学生が多かったら、そこで「違いますよ」と言わないで、むしろ「い」を指して、「それは、この字の読み方です」と教えて、練習させ、改めて「あ」に戻ります。これが「SW式」の、「教授は学習者の学びに従属する」という重要な理念の現れるところですので、いつも念頭において意識して指導してください。

続いて「お」「え」「う」と進みます。この順に進むのは、「お」と「え」は、言語によってさまざまな音で表されたり、もともと無かったりするので、「もっと唇を丸くして（「お」が「あ」に近くなったり、あいまいな音になったりする場合）」とか「もっと唇を横に引いて笑うみたいに（「え」が「い」に近い場合）」などと指示して、口の形を変えてトライさせるなど、指導に工夫が必要なことがあるからです。それでも、学習者が試行錯誤してきれいな音が出るまで、教師は我慢して待っていてください。けっして、モデル音を出して聞かせて、「まねしてみろ」という指示をださないこと。これも、「教授は学習に従属する」という理念の指導上の現れです。

それでも、「お」と「え」は初めから正しい音が出せる学習者がいて、早い段階で全員が出せるようになりますが、「う」になると、唇を前に突き出す、深い[u]の発音をす

る学生のほうが多くなるのが普通ですから、その場合は「違います」と言って、正しい音が出るまでトライさせてください。もちろん、途中で正しい音が出せるように、「唇を引いて」とか「おなかが痛くて、苦しい時のうめき声みたいな音」などと、学習者のトライの手がかりになるようなヒントを与えてください。正しい音が出たら、他の母音と同様、「はい、いまのキムさんのが正しいですね。はい。キムさんもう一度。はい、みなさんもどうぞ」というように進めて、練習してください。

次に、「か行」から「わ行」までを示し、それがすべて子音と母音の結合したシラブルであること、および母音の列に横に並ぶひらがなは、すべて同じ母音を共有するシラブルであることを教えて、「か」から読み方の類推をさせます。あとは、母音のときと同じ、発音が変わったら正しい音が出せるようにヒントを与え、指したひらがな以外の音で読んだら、そちらの音に該当するひらがなに飛んで、「それは、こっちですね」と言いながらもう一度読ませるなどして、学習者のトライした音がどこかの文字に結びつくように指導していきます。濁音・半濁音は、ひらがなを指したあと、表の左はしにある濁音記号と半濁音記号にポインターを移し、該当する記号をひらがなの右上の端に運ぶような動きで表します。拗音は、同様に「や行」の小さい文字をひらがなの右下に移すようなポインターの動きで示します。

ウ列音、特に「す」「つ」「ず／づ」の「う」が他の「う」よりさらに狭い母音であること、また、この四つと「ふ」は、子音が同じ行の他の音と違うことに注意させてください。また、ら行音・ざ行音などは少々やっかいです。何日かかけてやればよいので、一つずつ正確に発音できるまでやらせるのではなく、初回はとにかくざっくりと五十音を終わらせることを目標にしてください。「ん」は、唯一子音だけの文字ですが、「な行」の頭の子音だったり、「ま行」の頭の子音だったりする、鼻に抜ける変な音だということで、適当に指導してけっこうです。なお、これらの少々やっかいな子音を含むシラブルを教える時には、ヴェルボ・トナル法のテクニックが役に立ちますが、ここでは詳細にふれる余裕がありませんので、川口にお問い合わせください。

濁音・半濁音・拗音まで進んだら、単語を導入します。例えば、「い」と「す」をポインターで指し、音を続けて「いす」の音を示して読ませます。このとき、「す」のほうを「い」より少し高い音で読むようにジェスチャーなどで指導すると、アクセントも同時に学べます。平板のアクセントが難しいようなら、「まど」のような頭高型のアクセントを持つ単語から始めるのがよいでしょう。アクセントも含めて、ちゃんと読めるようになったら、それが「椅子」や「窓」であることを説明して、次の単語に移ります。できるだけ短時間のうちに、4拍（「ふでばこ」など）から6拍（「こくばんけし」など）ぐらいの単語に進んでおきます。「これは、本です」のような短い文もできます。

次に「い」「う」「つ」の色違いの文字を使うことばの表記を指導します。これは、それぞれ「え」で発音する「い」「お」で発音する「う」「促音」の表記です。つまり、緑の「い」を指したら「え」と読めと指導するわけです。これらは、もう単語のレベル

でないとは指導できないので、「とけい」「ぼうし」「ざっし」などの単語例で練習します。「がっこう」などの複合したものも扱うようにしてください。促音の小さい「っ」は、「おおきな休止」として導入するのがよく、「ダブルの子音」であるという説明よりも、次のシラブルの頭の子音へ行くときのポーズであるとして、その子音が発音されるまでゆっくり時間をかけて音を伸ばしているというイメージのほうがうまくいきます。これも、ヴェルボ・トナル法の応用で、分かりやすく示すことができます。ご興味があれば、お尋ねください。文型・文法の学習に入ってから、あるいはそれ以前に簡単な文などを作らせて、助詞の「は・へ・を」も同様に導入するとよいと思います。

カタカナの「SW式」導入も、同じように練習します。カタカタは、「外来音を表す」という重要な機能があるにもかかわらず、「市販式」ではひらがなと同じ五十音表の構成なので、カタカナの指導が不十分だったという意識から、この「仮名導入表」が発想されたと言ってもいいくらいです。この「SW式」カタカナ表の最大の工夫は、表の左の端に長音記号をおいたこと、およびア行の音のすべてに小さな文字つけておいたことです。これによって、「ジュース」のような長音を含む単語と「グァ」「ティ」「トゥ」「ジェ」「フォ」「ウィ」など、ひらがな表との対応では表れない音の表記を示すことが可能になりました。これは、「市販式」では相当の工夫をしないとできないことでした。（「デュ」は「市販式」でも示せますが）

「ヴ」の表記を加えて「ヴァ行」の表記を示せるようにしたこと、「シ・チ・ツ・フ」を緑色で示し、ひらがな表よりも積極的にこれらのシラブルの子音が同じ行の他のものと異なることを示したことも、カタカナのあるべき機能をはっきりと指導できるようにしたものです。このカタカナ表では、パワーポイントのスライド画面1枚に納めるために断念しましたが、実を言うと「シ・チ・ツ・フ」は、それぞれ、サ行・タ行・ハ行とは別の行を作って並べてもいいと思っています(下の図参照)。そのほうが、「外来音を表す」カタカナのシステムがよりよく分かるのではないかと思います。みなさんがご使用になるときに、この導入表から新しく表を作ってもけっこうです。なお、言うまでもないことですが、ヴァ行音の読み方はバ行音と同じだと指導してください。

ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	ア		
	×	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	イ		
ン	ヴ	ユ	ム	フ	×	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	ウ
		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	エ		
ヨ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	オ		

(ハ行のウ列音、ヤ行のイ列音はカタカナでは表記不能。ウ行ウ列音はウで代行)

#### ◇ 市販の五十音図の「サイレント・ウェイ式」導入

市販の五十音表を使っても、上記のような「サイレント・ウェイ式」五十音表の導入が可能です。以下に、その説明をいたしますが、比較を分かりやすくするため市販の五十音表を使用する場合を「市販式」と前述の「SW式」と区別します。

まず、黒板にひらがな五十音表を貼り付けて、上記と同様に、ポインターで「あ」を指します。次の「い」「え」「お」と進むのも、「SW式」と同じです。ただ、「う」になると唇を前に突き出す、深い[u]の発音をする学生が必ずいますので、丁寧に正しい音が出るまでトライさせてください。正しい音が出たら「はい、いまのキムさんののが正しいですね。はい。キムさんもう一度。はい、みなさんもどうぞ」というように進めてください。ウ列音、特に「す」「つ」「ず／づ」・「ふ」、また、ら行音・ざ行音などは少々やっかいです。何日かかけてやればよいので、一つずつ正確に発音できるまでやらせるのではなく、初日ほどにかくざっくりと五十音を終わらせることを目標にしてください。「ん」も、適当でけっこうです。

濁音・半濁音・拗音まで進んだら、単語を導入します。例えば、「い」と「す」をポインターで指し、音を続けて「いす」の音を示して読ませます。このとき、「す」のほうを「い」より少し高い音で読むようにジェスチュアなどで指導すると、アクセントも同時に学べます。平板のアクセントが難しいようなら、「まど」のような頭高型のアクセントを持つ単語から始めるのがよいでしょう。アクセントも含めて、ちゃんと読めるようになったら、それが「椅子」や「窓」であることを説明して、次の単語に移ります。できるだけ短時間のうちに、4拍（「ふでばこ」など）から6拍（「こくばんけし」など）ぐらいの単語に進んでおきます。「これは、本です」のような短い文もできます。

次に「い」「う」「つ」の欄に小さなマグネットを貼りつけます。これは、それぞれ「え」で発音する「い」「お」で発音する「う」「促音」を表します。つまり、「い」のマグネットの部分了指したら、「え」と読めと指導するわけで、「SW式」の緑の「い」と同じです。また、「う」のマグネットの部分了指したら、「お」と読めと指導するわけで、こちらは「SW式」の青い「う」と同じです。「つ」の横のマグネットは、「SW式」の赤い「つ」です。これらは、もう単語のレベルでないと指導できないので、「とけい」「ぼうし」「ざっし」などの単語例で練習します。「がっこう」などの複合したものも扱うようにしてください。文型・文法の学習に入ってから、あるいはそれ以前に簡単な文などを作らせて、助詞の「は・へ・を」も同様にマグネットを貼りつけて導入するとよいと思います。

カタカナ五十音表も、同じように練習します。ただ、ひらがなの場合と違う工夫の一つは、大きなマグネットを準備して、「ン」の下などの空いているところに貼っておくことです。これは、「長音」の記号を表します。「SW式」の縦・横の赤い棒と同じです。

「ジュース」などが単語例になります。もう一つの工夫は、ア行の音のすべてに小さなマグネットをつけておくことです。これは、「グァ」「ティ」「トゥ」「ジェ」「フォ」「ウイ」など、ひらがな表との対応では表れない音の練習のために、「SW 式」の黒い小文字を表す工夫です。もちろん、促音の「ツ」にもマグネットが必要なので、カタカナ表のためには合計5個の小さいマグネットと一つの大きいマグネットが必要となります。ヴァ行音は、「市販式」では五十音表に載っていませんので、「ウ」と濁点と小さい「ア〜オ」のマグネットを利用して表記の形を覚えておき、読み方はバ行音と同じと指導すればよいと思います。濁点は、他の濁音の表記から点々の部分を引っ張ってきて示します。また、「シ」「チ」「ツ」「フ」が同じ行の他の音節と頭の子音が異なることも、「市販式」では色分けで示してありませんので、意識してしっかり教えてください。

以上 (091123)